

I 論 文

戦間期宗教教育雑誌のボーイスカウト教育論受容過程
—東西本願寺における「仏教日曜学校の少年団化」論—

公共政策学研究科 福祉社会学専攻 博士後期1回生
松岡 悠和

1. はじめに

本稿は、戦間期の宗教教育雑誌にボーイスカウト教育論が受容された過程を明らかにする。東西本願寺の仏教日曜学校機関誌の分析から、ボーイスカウト教育論をめぐって方法論の導入と価値理念の置き換えがなされた経過を検討する。

ボーイスカウトは、現在世界171の国と地域で4000万人以上が参加する、歴史的にも世界最大の青少年教育運動である¹。愛国心と信仰心を基本とする理念、野外活動を中心とする教育内容、班制度（パトロール・システム）と呼ばれる小集団形式等の特徴を有する。20世紀初めにイギリスで始まったボーイスカウトは、なぜ教育運動として普遍的広がりをもつことが出来たのだろうか。

日本にボーイスカウトが紹介される際、その目的は論者によって社会教育、軍事教練、地方自治等の隔たりがあった²。ボーイスカウトの掲げる価値理念は、国家と信仰への忠誠にあった。しかしそれは、為政者や地域民衆等、教育主体の意図に応じてどのようにでも入れ替えることが出来、それにより普遍的広がり及び方法論としての応用・定着が可能になったのではなかろうか。例えば、ヒトラー・ユーゲントやピオネールはボーイスカウトを原型としながら国家政策に応じて独自の発達を遂げた³。またグループワークの方法論は早い段階からYMCAに導入され、現代でも社会教育や学校教育の場面で用いられている。

藤本茂生は、大阪におけるボーイスカウト普及過程で大阪YMCAを通してアメリカのボーイスカウト運動の影響を大きく受けたことを明らかにした。特にその過程を、アメリカボーイスカウト連盟の「素朴な模倣ではなく、それを大阪の土壤に適応するように『土着化』させようとした」と指摘する⁴。ボーイスカウト教育論の価値理念は、考案者ベーデン・パウエルの構想を超えて多様に置き換えることが出来たため、地域的な教育ニーズへと結びついていったと考えられる。信仰面は当初、イギリスのキリスト教を基盤とする思想であったが、世界への普及過程で宗教、文化の差異にも適合していった。戦前日本では紹介時に宗教色が薄れていたが、一方で国内の宗教政策は神社を「非宗教」と位置づけ、皇室崇敬と一体化して国家神道を構築する特殊な状態だった。しかし、神社以外の仏教やキリスト教の宗教教育界にもボーイスカウト教育論は影響を及ぼした。それは独自の解釈によって組み換えられ、それぞれの宗教的価値理念の下で受容された。

本稿は、浄土真宗東西本願寺の2つの雑誌を取り上げ、仏教日曜学校におけるボーイスカウト教育論の受容過程を明らかにする。扱う雑誌は第一に、東本願寺すなわち浄土真宗大谷派の『児童と宗教』である。1922年に大谷派本願寺社会課によって創刊され、1931年に発行者は真宗大谷派日曜学校に移行した。1933年から大谷派宗務所教学課発行となって、タイトルも『青少年と宗教』に改題した。1937年には浄土真宗大谷派の機関誌『真宗』に統合され、事実上廃刊となった⁵。

第二に、西本願寺すなわち浄土真宗本願寺派の『日曜学校研究』である。1912年頃に『日曜日』として興教書院から発行されていた雑誌が、後に『日曜教園』となり⁶、1922年から『日曜学校研究』と改題し日曜学校研究社から発行された⁷。東西本願寺は、いずれも1930年頃から本山主導でボーイスカウト導入を進めた。以下の章で、各誌におけるボーイスカウ

ト教育論の影響を受けた記事を分析する⁸。

2. 「日曜学校の少年団化」論——大谷派の受容過程

(1) 大谷派・健児団の独自性

東本願寺すなわち大谷派では、1932年に「少年団訓練日曜学校幹部養成所」のキャンプを開設するなど、本格的にその研究と指導者養成がなされていた⁹。『児童と宗教』の主な読者層は仏教日曜学校教師だったが、大谷派内でのボーイスカウト事業に関わる機関誌の役割も果たした。とりわけボーイスカウト教育論については、理論面を築いた藤田正雄と、実践面を研究した小山乙若丸の記事の他、本山および各地域での組織的活動が紹介されている。ボーイスカウトの呼称は、1922年の少年団日本連盟設立以後は一般的に「少年団」が主流だったが、大谷派では「健児団」と呼ばれた。仏教日曜学校を基盤とする誌上において、ボーイスカウト教育論がいかに受容されたか、藤田と小山の記事から考察する。

大谷派における健児団組織化に携わった藤田正雄は、仏教日曜学校の課題克服手段としてボーイスカウト教育の導入を考えた。「宗教・育機関として日曜学校は現在の形態と内容でよいであろうか」と問い合わせ、その課題を「宗教・育機関の必要如何といふことよりも、その方法に苦しんでゐる」と指摘する¹⁰。ボーイスカウトの方法論が有効であると主張し、「日曜学校が少年団化すること」を提唱した¹¹。

藤田は、日曜学校と少年団の関係には次の4形式があると示した。

- 一、日曜学校の形態だけで充分で、今さら少年団などの形態にかゝる必要なし。
若し現状の日曜学校が宗教・育に不充分だとすれば、その点を改めればよい。
- 二、日曜学校を全然少年団に組織変更する。
- 三、別個の存在として日曜学校と少年団とを併存する。
- 四、現在の日曜学校に少年団教育法の方式と内容とを多分に採用する¹²。

自身は第三の、日曜学校と少年団の併存を主張する立場にあると明言する。しかし運営上の困難が大きいことから、実際には「日曜学校に少年団教育法を加味」することを奨める。その方法は第一に「日曜学校教師がスカウトの指導者の如き態度に出ること」、第二に「日曜学校の設備と組織とにスカウト教育法より採用」すること、第三に「日曜学校の教案（教材、教課教法）にスカウト教育法をとり入れること」を挙げた¹³。

藤田にとってボーイスカウト教育の目的は、児童をして「当にあるべき人生」を見つけさせることにあり、それ自体が宗教教育の目的と合致すると語られる¹⁴。つまり、人格教育の基礎は「児童の自発性と自由」に由来し、班制度はそれを発揮するのに適した方法だと理解される。スカウト教育の根本原理に宗教性を見出しながら、方法論を巧みに導入する発想である。さらにその指導原理は、少年団によって異なる独自性を見るべきだという。

少年団日本連盟は少年団の司配者ではない。それ故、各少年団に独特の指導原理があ

つてよいのである。我等の少年団には我等に独特の則ち親鸞聖人の宗教に生きるといふ所の指導原理があるのである¹⁵。

ボーイスカウト教育の班制度は、子どもの間で自治を行わせるための仕組みである。藤田はその自治関係を組織間にも適用し、大谷健児団の独自性を強調した。それは、ボーイスカウトから離れるのではなく、むしろ宗教性を根底に位置づけることが教育上適切だと理解された。しかしこのような価値理念の置き換えは、表面上の形式や教育内容の模倣に留まってしまわないのだろうか。

(2) 仏教日曜学校「教案」への導入

『児童と宗教』は、大谷派日曜学校連盟の機関誌として各月の「教案」を掲載している。1933年から36年にかけて、その担当は小山乙若丸だった。小山は31年に少年団日本連盟の中国地方実修所に入所し、「私は童話に興味を持つている処から、營火には營火童話の研究を感じた」、「私が少年の宗教的教育に興味を持つている関係上飽迄自分を忘れて進みたいと思ふ」と感想を残している¹⁶。ボーイスカウトの方法論を日曜学校に連づけようとする小山は、「日曜学校も、茲に新しい潑刺とした氣で、多種多様な教材で進まねばならない時が来た」と述べ¹⁷、ボーイスカウト教育を織り交ぜた教案を著した。

形式面では、子どもの役割分担の際に、ボーイスカウトの班制度の活用を挙げ、特に遠足等、屋外での活動では「少年団に於ける如く班制の利用が最も望ましい」と説明した¹⁸。班で自治を行わせるために、「命令の伝達、配布物等の場合はいつも、班長にせしめる。又一班の事故も班長に云はしめて、報告をなさしめる」という¹⁹。

理念面の特徴として、次のような教案がある。天長節の教材として、「皇室を敬ひ、忠義を説く」ために少年団の「宣誓を覚えしめるも確によい方法」だとし、宣誓の全文を引用して紹介する²⁰。「忍耐刻苦勉励を鼓舞する」ために「少年団の宣誓なりおきてをよく味はしめる」ほか²¹、少年団の標語「そなへよつねに」の説明とあわせて、少年団の団歌を教える教案もある²²。ただしこれらは、藤田が提唱したように教育原理の根底で日曜学校と少年団が結合する訳ではなく、単に日曜学校の児童に体験的に少年団の断片を教える内容に過ぎない。

教育内容については、ボーイスカウトの技術面のみをひたすら教える教案もある。「少年団教育をむつゝりやるもよからう。結索法、手旗信号、急救或は少年の技能発揮のための写真、自転車、水泳、園芸、相撲、養魚、喇叭、測量等についての暗示を与へつゝ練習の方法をとる」²³。「溺水に対する応急法」、「卒倒に対する応急法及患者運搬法」²⁴、「創傷に対する応急手当」、「火傷、湯傷に対する応急手当」、「眼の塵に対する応急手当」、「凍傷に対する応急手当」も扱っている²⁵。しかし、ボーイスカウトが少人数の班制度を特徴とするのに対し、小山の教案では内容がボーイスカウト式であっても教師が児童に一方的に教授する関係に陥りかねない。工夫として、「結索の練習」としていくつかの結び方を「考查する」とよいとする他、目隠しで競争して結ぶゲームを紹介している²⁶。また、少年団の「技能章」の制度を日曜学校に合うように改変して取り入れている。「スカウトに於ては技能章として、

特に勝れた技能のある者には、章を与へ而して益々これに努力せしむるような制度があるから、日校に於ては音楽、スケッチ、童謡、小品文等の上手なものが居るから、これらの発表をさすも面白い」²⁷。

大谷派においては、理論面で藤田の原理的な考察により、ボーイスカウト教育論が宗教教育と根底で接続すると理解された。他方、実践面で見た小山の教案では、日曜学校でボーイスカウトのあれこれを体験させるに留まる。「少年団訓練日曜学校幹部養成所」では、班制度が重視されたのに対し²⁸、誌上ではむしろ日曜学校の形態の根本的な転換は見られず、ボーイスカウトの内容が時々織り交ぜられる程度だったといえる。しかしこれは、大谷派においてボーイスカウト教育論の受容が表面的なものに過ぎなかつたことを意味するわけではない。1930年代を通して大谷健児団の組織は全国に広がり、一定の規模を有した。そのためにむしろ、仏教日曜学校が独自の歩みを進める中で、必ずしも忠実なボーイスカウト教育論の再現の必要には迫られなかつたのではなかろうか。

3. 仏教日曜学校の課題克服手段として——本願寺派の受容過程

(1) 仏教日曜学校批判と自治の重視

本願寺派における少年団の組織過程は、日野照正による先行研究がある²⁹。1925年に龍谷大学内にスカウト研究会が立ち上げられ、続いて中央日曜学校を母体に龍谷少年団が結成された。『日曜学校研究』では、それら初期に活躍した実践家の論稿も掲載されている。その多くは、仏教日曜学校の課題克服の手段としてボーイスカウト教育論を考えていた。

龍谷少年団初代団長の藤井制心は、本願寺派の日曜学校界の欠点を次のように列挙する。お斬中心、室内用主義、興味中心、女子主体、静的に偏し動的に欠く、他律的注入主義、実行がなく概念的、団体訓練の不足³⁰。藤井は、これらの欠点からボーイスカウトの必然性が高まったという。しかし地方、農村の仏教日曜学校すべてで少年団を設立するのは現実的に無理がある。「よく此〔少年団〕運動の精神を本質を認識」すれば、設立は出来なくても「せめてそのシステムでも日曜学校の中に取り入れて前述の日曜学校に於ける欠点を補」うことが出来ると指摘する。それは単なる戸外でのゲームや訓練を想定しているわけではない。採用すべきは「班制教育其他のスカウトシステム」であり、スカウト教育のより本質的部分を理解していたと考えられる³¹。

少年団を導入するときには、「日曜学校の中へどの程度までスカウト組織をとり入れるか」あるいはボーイスカウトを「宗教々育と同じレベルに置いて両者を並行」する2通りがあると述べる。特に藤井は、農村での課題等にも留意した上で、日曜学校の「伝統を破壊すべき謂ではなく良き伝統の上に幾分新生面を發揮せられたならばと思考するところ」と穏やかな主張となっている³²。

藤井とともに初期の龍谷少年団に携わった長納圓信は、「日曜学校の行くべき道」と題した論稿で、ボーイスカウト・少年団の言葉を一切使わずに、日曜学校のボーイスカウト教育を加味すべきという趣旨を巧みに綴っている³³。ボーイスカウトの表記を避けた確かな理由は分からぬが、一定数の日曜学校教師がボーイスカウトに否定的な先入観を持っていた

ためであろうかと推察される。

長納は、お嘸中心の従来の仏教日曜学校の形態を批判する。日曜学校の目的は「児童の生活全体の上に於ける宗教的体験の指導」であり、それは生活全体への関与である。巧みな話術、紙芝居、あるいはお菓子で「単に児童の興味をひく方法に依つて児童の理解しやすい形で教義を注入」することは、目的から逸脱する。「日曜学校教師がいかに法話の技術に長じても日曜学校其のものを改革せぬ以上はけつして満足とは言い得ぬ」と課題意識を明らかにする³⁴。

そして現行の仏教日曜学校に加えるべき要素として、「児童の自発的活動」と「自然の傾向」を挙げる。小学校高学年は、「児童自身に一つの共同団体とも言ふべきもの」が存在し、「団体的に何かを常に計画するやうな傾向」がある。しかし共同作業によって自発活動を生じさせるためには、従来の静的な仏教日曜学校では出来ない。戸外での活動を通して自発的な活動にすると指摘する。また集団意識を自覚させるためには、形式面で精神的共同性を確立する必要がある。すなわち宗教的儀礼のように、入校式や服装において日曜学校特別の形式を設けることで、自然と共同団体を結束させるという³⁵。

同様の問題意識は広く持たれていた。「少年団の訓練法が日校に取り入れられる」ことを積極的に奨めた高田義人の記事もある。それによれば、仏教日曜学校の「一般の生徒達は相変らず静謐さを強要されて澁刺さを失なつた日校へ通はされて」いるという。「健児団に入団して居る子供達は大自然の懷の中に宗教的な感激にひたる機会をもつ」ことから、仏教日曜学校もより活動的にする必要がある。具体的には、毎週日曜日の活動を「自治的に行事させたり、附近の美化作業や、遠足・ゲーム・体操・遊戯（舞踊）等」の動的な性質を高める。このように「少年団の行事を全日校に及ぼ」すことが、子どもの宗教教育に必要だと指摘する。まだ少年団教育に至らない低学年であっても、「出来るだけ外へ出て自然の中に楽しく遊びながらお話や唱歌、遊戯（舞踊）ゲーム等をさせた方がよい」として、日曜学校教育全体を活動的にする必要を指摘した³⁶。

龍谷少年団隊長を務めた山崎昭見は、少年団教育の特徴を、少人数の班組織（パトロール・システム）に見出した。

班組織にする事は、全員が、班をそれへの単位として自治的に動き、各個性が余程重要視される事に依り、全員が常に自発的に動くように考へられて居るのである。即ち全体が一つの有機的な活発な活動をなす上に、最も研究し、考へられた組織法である³⁷

この教育方法が日曜学校に適している理由として第一に、宗教教育を原理的に突き詰めると、その目標は人間性の自覚、すなわち個々人の魂の目覚めにあると述べる。したがって日曜学校の教師で「数の多い事をいまだほこりにして居る宗育〔宗教教育のこと〕者の多い事は何となげかはしい事であらうか」³⁸と、問題視する³⁹。第二に、宗教教育の実践主義を標榜し、觀念論に陥らないことが大切だと指摘する。10代半ばは日曜学校と青年団の間の時期で、教育自体が難しいという。少年団の班組織は、自ずから子どもを実践主義に導くと考えられた。

(2) 価値理念の置き換え

ボーイスカウト教育は、方法論として少年の班制度に特徴があったが、同時に国家、信仰の価値理念を掲げる。それを象徴するのが「宣誓」であるが、龍谷少年団では次の文言を採用していた（下線は引用者）⁴⁰。

私は純一なる信仰に基き、名誉にかけて次の三条を誓ひます。

- 一、仏陀を尊び皇室を敬ひます。
- 一、人の為世の為國の為に尽します。
- 一、少年団のおきてを守ります。

仏教の信仰心を皇室崇敬を並べ、指導上の価値規範である「宣誓」に表された。仏教日曜学校の特徴に讃仏歌や遊戯会があるが、唱歌にも同様の価値理念の合成を見ることができる。北峰頌修作詞の「みのりのために」4番は次のような歌詞である。「行けよ、行けよ、行けよ／健児の胸には、鉄の意志あり／けふぞ仰がむ、ほとけのまへに／ちかひは固し、みのりのために」⁴¹。ここでは、「ちかひ」すなわちボーイスカウトの「宣誓」の確かさが、仏への信仰心へと昇華される。

宗教的に価値理念が置き換えられていても、一方で軍国主義的な教育論も存在した。宗教教育について多くの著作を出した神根惣生は、仏教日曜学校における「法話」の題材に少年団を取り上げ、来たるべき戦争への用意を説いた。

少年団の標語を知つて居りますか。「備へよ常に」みなさん、いつて御覧なさい。「備へよ常に」とは、どんなことか知つて居ますか、何も事の起らない時に、十分の用意をして置く。火事のない時に消防の準備をして置く。戦争のない時に、国を守る用意をして置くのがそれであります。〔中略〕私達も日本の国に生れたお陰で仏様の教を聞かせて頂き、今度死んでから仏様のお国に生れさせて頂くことが出来るのであります。それでこの日本の国を守るのは仏様のお国を守ることであります。私達は平生から心の用意をして置かねばなりません。〔中略〕私達の日本の国は、世界中を相手にして戦争しなければならないやうな恐しいことに会ふ、かもしれないのです。然し、どんな時にも国民が心を一つにして生命がけで国を守れば、この仏様の教の広まつて居る尊いお国を守ることが出来ます。お国のために喜んで生命を捧げる国民の居る国は、どんな強い国が攻めて来ても亡ぼすことは出来ないであります⁴²。

仏教の信仰と国家への忠誠心が融合し、一度戦争が起これば命を捧げることができるよう準備する内容となっている。ボーイスカウト教育論の価値理念が巧妙に置き換えられ、軍国主義を精神面から支える宗教教育が形成されていた。仏教日曜学校の「法話」は、教師が一方的に話す形態であり、ボーイスカウト本来の班制度による自治的活動とは程遠い。ボーイスカウトの「いいとこ取り」により仏教日曜学校の発展を目指すのではなく、軍国主義

と仏教教育の結合に至る場合もあった。

4. おわりに

東西本願寺の日曜学校機関誌では、1930年代前半からボーイスカウト教育論を受容し、仏教日曜学校教育と融合した独自の展開を見せた。いずれも、従来の仏教日曜学校にボーイスカウト教育論を採用することで新たな展開を期待していた。大谷派の小山が単にボーイスカウトの技術を日曜学校内で教授しようとしたのに対し、本願寺派では班制度と自治をボーイスカウト教育論の中核と理解し、子どもの自発的な自己教育として取り入れようとした模索されていた。とりわけ本願寺派では、日曜学校制度への課題意識が明確に示されていた。これはボーイスカウト教育論を単なる手段として採用するのではなく、むしろより本質的な理解を促したと考えられる。

一方、いずれも浄土真宗の教義が中心にあることに変わりはなく、ボーイスカウト教育論の受容過程でも価値理念が仏教信仰に置き換えられた。小山乙若丸とともに当時の大谷健児団で指導的立場にあった野間修は、「大谷健児団指針素描」でその位置を次のように説明している。

大谷健児団とは〔中略〕ベーデンパウエル將軍の創始した少年斥候隊の謂でもなく、英國少年団でもない。又、わが文部省構内に事務所を置き、創設より今日に至るまで満十ヶ年を経過したる少年団日本連盟に内包されるものでもない。大谷健児団は厳然として独自の境界を持つ、又持つてゐるべきものである⁴³

仏教日曜学校がボーイスカウト教育論を受容しようとするとき、少年団日本連盟との関係が問題になることは当然であった。誌上では、独自の宗教的理念を根底に位置づけることで、価値理念を置き換えて従来の仏教日曜学校と対立しない理論展開がなされた。表面的形式的な導入も見られるが、それも含めてボーイスカウトの一つの受容形態だと理解できる。

ボーイスカウト教育論は、その価値理念を置き換えられることにより、宗教、文化を超えて普遍的に広がってきた。またその教育方法が部分的に切り取られ、学校少年団の形をとつたり課外活動などの青少年指導においても応用されたりしてきた。しかしその応用の広がりから軍国主義とも結びつき、戦争に準備するという指導をももたらした。それら全体として戦時下には国民精神総動員運動に組み入れられざるを得なかつた。

戦後には再び価値理念を置き換えることで、民主的市民の育成という名のもと組織が復活し、現在まで活動が続いている。教育主体の意図によって価値理念のみを入れ替えられてきた問題に対し、戦後どこまで反省されているかは怪しい。現代においては、いかなる価値を掲げるのか、不斷に問い合わせなければならないだろう。

註

- ¹ 『スカウティング』通巻741号、公益財団法人ボーイスカウト日本連盟、2021年、p.13
- ² 松岡悠和「日本におけるボーイスカウトの紹介に関する一考察—『翻訳的社会教育論』の再検討—」『京都府立大学社会教育研究年報』第4号、2020年
- ³ 田中治彦『少年団運動の成立と展開 英国ボーイスカウトから学校少年団まで』九州大学出版会、1999年
- ⁴ 藤本茂生「20世紀前半の太平洋世界におけるボーイスカウト運動史—大阪のボーイスカウト団体を例として—」『アメリカス研究』第12号、天理大学アメリカス学会、2007年、p.7
- ⁵ 佐賀枝夏文「『児童と宗教』解説」「『児童と宗教』解説・総目次・索引」不二出版、2013年、pp.17-18
- ⁶ 神根惣生「日曜学校の過去・現在・未来記」『日曜学校研究』第22巻第3号、1933年、pp.47-48
- ⁷ 本稿で用いる『日曜学校研究』は、筆者が古書店を通じて入手した。国立国会図書館をはじめ図書館での所蔵を確認できず、また日野照正『本願寺（派）スカウトの源流』（刊行委員会、2003年）においても言及されていない。仏教日曜学校およびボーイスカウト史研究における基本的資料になると考えられるが、この史料的位置づけは今後十分検討する必要がある。「スカウト特集号」（1931年11月号）、「スカウト研究号」（1932年11月号）を含め、未見の巻号も多い。
- ⁸ 日曜学校というと一般にキリスト教会の事業だと理解される。日本の場合、キリスト教自体が地域で一定の地盤と勢力を築いていたとは考えにくいが、日曜学校の組織と実践の蓄積は当時見るべきものがあり、仏教側と競合的に拡大しあう状態であった。宗教教育系雑誌についても、日曜学校協会、宗教教育協会、日本基督教会、メソヂスト教会の組織や教派によってそれぞれに発行されたり、統合されたりした。キリスト教はYMCA、YWCAの組織を有したが、日曜学校事業ではボーイスカウト教育論の影響も一定程度あったと考えられる。
- ⁹ 松岡悠和「真宗大谷派における『少年団訓練日曜学校幹部養成所』の開設」『スカウティング研究』第20号、2019年
- ¹⁰ 藤田正雄「日曜学校と少年団」『児童と宗教』第12巻第4号、1933年、p.4
- ¹¹ 同上、p.2
- ¹² 藤田正雄「日曜学校と少年団（三）」『児童と宗教』第12巻第6号、1933年、p.3
- ¹³ 藤田正雄「日曜学校と少年団（三）」『児童と宗教』第12巻第7号、1933年、pp.2-11
- ¹⁴ 藤田正雄「日曜学校と少年団（二）」『児童と宗教』第12巻第5号、1933年、p.3
- ¹⁵ 同上、p.11
- ¹⁶ 小山乙若丸「中国地方実修所入所雑感」『少年団研究』第8巻第8号、1931年8月、pp.28-29
- ¹⁷ 小山乙若丸「三月の教案」『青少年と宗教』第15巻第3号、1936年、p.33
- ¹⁸ 小山乙若丸「十月の教案」『児童と宗教』第12巻第9号、1933年、p.9
- ¹⁹ 小山乙若丸「九月の教案」『青少年と宗教』第14巻第10号、1935年、pp.77-83
- ²⁰ 小山乙若丸「四月の教案」『児童と宗教』第12巻第4号、1933年、p.25
- ²¹ 小山乙若丸「五月の教案」『児童と宗教』第12巻第5号、1933年、p.20
- ²² 小山乙若丸「八月の教案」『児童と宗教』第12巻第8号、1933年、p.15
- ²³ 同上、p.15
- ²⁴ 小山乙若丸「七月の教案」『青少年と宗教』第14巻第8号、1935年、pp.77-81
- ²⁵ 小山乙若丸「十月の教案」『青少年と宗教』第14巻第11号、1935年、pp.38-44
- ²⁶ 小山、前掲「七月の教案」、p.77
- ²⁷ 小山乙若丸「七月の教案」『児童と宗教』第12巻第7号、1933年、p.30
- ²⁸ 松岡、前掲「真宗大谷派における『少年団訓練日曜学校幹部養成所』の開設」、pp.103-104

-
- ²⁹ 日野照正『本願寺（派）スカウトの源流』刊行委員会、2003年
- ³⁰ 藤井制心「慶讃法要に相遇ふて—佛教音楽、少年団運動の展望—」『日曜学校研究』第22巻第3号、1933年、p.39
- ³¹ 同上、pp.41-42
- ³² 同上、p.43
- ³³ 長納圓信「日曜学校の行くべき道」『日曜学校研究』第22巻第5号、1933年
- ³⁴ 同上、pp.4-5
- ³⁵ 同上、p.6-8
- ³⁶ 高田義人「日校舞踊其の他に就て（日校の宗教々育に活を入れよ）」『日曜学校研究』第25巻第6号、1937年、pp.5-6
- ³⁷ 山崎昭見「宗教々育と少年団教育運動」『日曜学校研究』第25巻第6号、1937年、p.4
- ³⁸ 同上、p.3
- ³⁹ ちなみに同記事中で山崎は、「天理教々師の多量生産主義よりも金光教々師の人物鍛錬主義にその将来性のある」と評価している（p.3）。たしかに人数規模では天理教は金光教より大きな勢力を持っていました。近隣の大谷連盟で、金光教の少年団が成立当初から指導的立場にあったことから、金光教そのものへの親近感があったと推察される。
- ⁴⁰ なお下線部は、少年団日本連盟では「神聖なる信仰」「神明を尊び」とされている。大谷健児団は、少年団日本連盟の宣誓文をそのまま使用していた。
- ⁴¹ 北峰頌修作歌・野村成仁作曲「みのりのために」『日曜学校研究』第22巻第10号、1934年、p.2
- ⁴² 神根惣生「九月の法話」『日曜学校研究』第22巻第7号、1933年、pp.4-5
- ⁴³ 野間修「大谷健児団指針素描（一）」『青少年と宗教』第12巻第10号、1933年、p.35

京都府立大学社会教育研究年報 第5号
2020年度

編集・発行 京都府立大学社会教育学研究室・京都社会教育研究会
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5 tadokoro@kpu.ac.jp
京都府立大学 公共政策学部 福祉社会学科（教育・心理学講座）
2021年3月31日 発行

印刷・製本 京都府立医科大学・京都府立大学生活協同組合